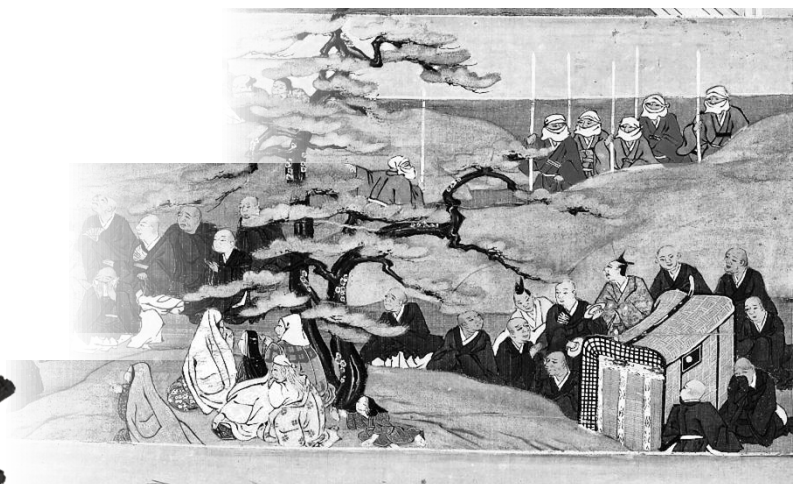




連続講座

いま、 葬儀を 考える

報告書



真宗大谷派 名古屋教区 教化委員会
真宗の葬儀 実行委員会



目 次

はじめに	p. 2
第 1 章 枕勤めについて	
1 講義抄録.....	p. 4
2 参加者の声.....	p. 8
3 実行委員の所感・提言.....	p. 13
第 2 章 通夜について	
1 講義抄録.....	p. 15
2 参加者の声.....	p. 19
3 実行委員の所感・提言.....	p. 24
第 3 章 葬儀について	
1 講義抄録.....	p. 26
2 参加者の声.....	p. 30
3 実行委員の所感・提言.....	p. 35
おわりに	p. 36
付 録	p. 37

はじめに

この報告書は、真宗の葬儀実行委員会（真宗大谷派 名古屋教区教化委員会）主催の事業である連続講座「いま、葬儀を考える」（全 3 回、2023 年度～2024 年度に開催）の記録をまとめたものである。

真宗の葬儀実行委員会は 2021 年度より実働を始めたが、当委員会設置の背景には、日本の人口動態の変化や宗教意識の変化、ポータルサイトなどを窓口とした葬儀受託の流れの変化、コロナ禍を発端とする儀式の小規模化、そして「お坊さんのいないお葬式」（※2021 年 5 月に事業撤退）にみられる無宗教葬の顕在化などの、名古屋教区内における葬送儀礼の急速な変化に対する危機感の高まりがあったためである。

今回の連続講座は、そのような変化に対して「どのように対応していくべきか」という視点ではなく、まず「なぜ葬儀を勤めるのか」という根本的な問いに立つべきだと考え、講師として蒲池勢至氏（元同朋大学特任教授・同朋大学仏教文化研究所研究顧問・名古屋教区第 3 組長善寺前住職）をお招きし、全 3 回にわたり「枕勤め」「通夜」「葬儀」の各儀式に分けて講座を開催した。各講座で儀式の意義と歴史を学び、寺院関係者・門徒・葬儀社スタッフによる語り合いの時間を設けて意見交換を行った。

本報告書の構成は、講座ごとの「講義抄録」を掲載し、次に班別の語り合いと参加者に筆記していただいた振り返りシートの要点を抄出した「参加者の声」、そしてそれらを受けての実行委員からの「所感と提言」となっている。

語り合いなどでは厳しい意見も聞かれたが、この報告書にまとめられた声に真摯に耳を傾け、今こそ宗祖親鸞聖人が生涯持ち続けてきた「歎異の精神」に立ち返り、葬送儀礼がどのような変化を遂げようとも、そこに集う全ての人にとって大切な仏縁となることを切に願うものである。

どなたでも
ご参加いただけます

〔第1回〕
4月9日(火) 枕勤めについて

時間：午後3時～6時15分

講師：蒲池勢至氏（長善寺前住職）

発題：榎山正樹氏（教西寺住職）

内容：講義、語り合い、振り返り

定員：80名（先着順）

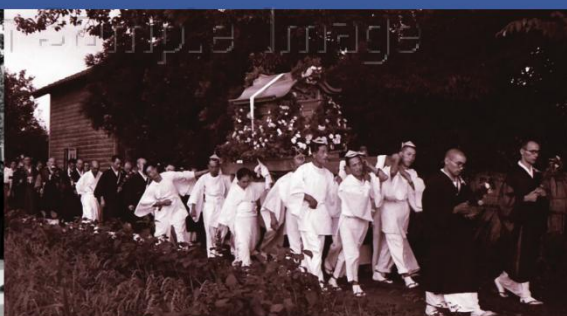
場所：名古屋教務所 議事堂 ほか

〔連続講座〕 いま、葬儀を考える

なぜ葬儀を勤めるのか？

人が亡くなった時に葬儀を執行するという宗教的伝統が崩れ始めている今、それを自明のこととしてきた私たちに、この問いが突きつけられています。その問いに向き合うにあたり、〔第1回〕枕勤め、〔第2回〕通夜、〔第3回〕葬儀のそれぞれの意義、歴史的背景、変遷、そして真宗門徒が今日まで大切に守り、受け継いできた精神を確かめたいと願い、連続講座を開催いたします。

変化の激流の中で、一体何に向き合い、何を守り、伝えていくのか。葬送に関わる僧侶、葬儀社、参列される方が一緒に考える機会です。どうぞご参加ください。



蒲池 勢至

gamaike seishi
1951年愛知県生まれ。元同朋
大学特任教授、真宗大谷派長善
寺前住職、同朋大学仏教文化研
究所研究顧問。

写真：左上 愛知県南知多町の日間賀島、寺院境内で葬儀、立棺（土葬）出棺
右上 昭和29年 晩烏敏氏の葬儀・葬列 棺を入れた輿を運ぶ
撮影：横山定男氏 画像提供：了善寺様
左下 平成3年 旧八開村（現、愛西市）の葬儀・出棺・葬列

参加費：無料
申込期限：2024年3月末日
必ず事前にお申込みください
（裏面参照）

名古屋市中区橋2-8-55
052-331-2468

主催：名古屋教区教化委員会
真宗の葬儀実行委員会

第1章 - 1 「枕勤めについて」 講義抄録（講師：蒲池勢至氏）

はじめに

ご紹介にあずかりました蒲池と申します。私は民俗学を専門としており、若い頃から葬送儀礼と墓制の研究を続けてきました。第1回講座のテーマは「枕勤め」になります。

長年、愛知県史の仕事で愛知県中を周る中で、各地の葬儀や火葬の仕方を調査しました。昭和30年代から40年代にみられた昔の儀礼が、平成以後から10年ほど前までの間に大きく変わってしまいました。なぜ葬儀は現在の様相に変化したのでしょうか。今の形がよいのか、昔の形にどのような意味があったのか、という基本的なところから考えていく必要があります。

先日、一人住まいをされていた方が急に亡くなられたために無縁者扱いにされ、気がついたらすでに火葬にされていたということがありました。ご兄弟が車で10分ほどのところに居られたのですが連絡もなく、一体誰が火葬を許可したのだろうかと報道されました。また愛知県内で、長い間ご遺体が葬儀場に放置されていたという報道もありました。死ぬにも命をかけて死なないと死ねないし、死後のことは自分では何もできない。現代はそういう局面を迎えているのだと思います。

死は「日常」か「非日常」か

私はもともと真宗寺院の出身ではなく、浄土宗のお寺の生まれです。母が亡くなった時、お莊嚴の様子やご遺体の配置について写真に残しておこうとしたのですが、目の前の死の圧迫感によって「撮っていいのだろうか」という思いがよぎり、なかなか写真を撮ることができませんでした。死というものは一体何なのか、そして当然、そこにある生というものは何なのかを考えなければならなかったと感じた経験でした。2022年の『同朋新聞』に、このような記事が掲載されていました。

南無阿弥陀仏の葬儀 ～真宗の仏事の回復を願って～ なぜ葬儀を勤めるのか

私たちにとって「死」は決して「非日常」な出来事ではありません。人は皆、必ずいのちを終えていくことは、誰もが知っていることなのですが、なかなか自分自身のこととして受けとることができないのではないのでしょうか。

私たちは「死」ということを考えるとき、それは悲しいことであり、怖いことであり、苦しいことであるという思いに囚われます。そして、できるならば「死」をなるべく遠ざけて、見ないように、触れないようにしたいという気持ちになることもあります。

しかし、「死」は「日常」なのです。いつでも私たちの「生」と共にあります。そのことを、亡くなった方は、いのち終えていかれるその最期に、私たちが必ず死にゆくいのちを生きていることを、身をもって教えてください。そのような亡き方からの生涯をかけた大切なメッセージを、あらためて一人ひとりが静かに受け取る時と場が必要なのです。

それが、私たち真宗門徒が大切にしてきた、悲しみと共に過ごす、通夜と葬儀という「真宗の御仏事」なのです。 (『同朋新聞』2022年5月号)

長年、葬儀を調査研究してきた身として、そして幾人もの身内を亡くした経験から、この記事を読んだ時に疑問が湧き起こりました。それは、死とは「日常」か「非日常」か、という問題です。もちろん生死一如とお釈迦さまはお説きになっておられますが、ご遺体と遺族の間には、まず仏事以前の問題があるのではないのでしょうか。「死」というのは頭で考えるのではなく、残された遺族にとっては眼前の不条理な事実としてあるわけです。死とは「日常」ではありません。死を目の当たり

にした時、私や周りの人々は「非日常」の時間と空間の中に放り込まれます。異常なまでの研ぎ澄まされた感性と恐怖、そして死者への愛着、説明できないこうした状況の中に置かれます。死とは思想ではなく、眼前の不条理な事実なのです。

死（遺体）への恐怖と愛着

初めてご遺体を前にした時、人は「怖い」と感じると思います。以前、一人暮らしをしているご門徒が風呂場で亡くなられた時は大変でした。なかなか浴槽から引き上げることができないし、警察や検視官も入ります。それらが済み、私がお住いのアパートに行くと、ご兄弟のお連れ合いが「遺体と一緒にいるのが怖い」とおっしゃっていました。また私の親戚が亡くなった時には、お通夜の後、棺を親族の部屋に移動させました。高校生のお孫さんと話していたらやはり「怖い」と言っていました。

遺族にとって、それは「日常」ではなく「非日常」の空間なのです。生きている者にとっては危機的な状況にあるのです。なかなか遺体と同居できないことがあるのです。しかし矛盾しているようですが、一方で愛着も確かにあるのです。最近は愛着の方ばかりが強調されがちですが、恐怖もある。それが同時に起こるのが葬送儀礼なのです。立川武蔵先生（国立民族学博物館名誉教授、仏教学・インド哲学）は、

死はわれわれの時間を切り取ってしまうものです。時間の中にあるものが、時間を超えたものをいかに捉えることができるのか。 （『仏教史 第一巻 仏教の源泉』）

と書いておられます。葬儀の間のことを何も覚えていない、とおっしゃる遺族の方がいます。時間が止まってしまうのです。何日間のことだったのか、何をどうしていたのか、ご飯を食べていたのか、そういった記憶が飛んでしまうのです。そのような「非日常」の時間と空間が枕勤めの場合なのです。そういった場で、私たち僧侶はどのように対応をしていくのがよいのでしょうか。

蘇生儀礼（愛着）と絶縁儀礼（恐怖）

「亡くなった人の元気だった時の写真を持ってきてください」「好きだった衣服を持ってきてください」と言って、生前の姿に復元するということは愛着なのです。綺麗にしてお別れをしていただきたいというわけです。これを「蘇生儀礼」といいます。もう一度生き返ってほしいという愛着の思いから生まれた儀礼です。その一方で「絶縁儀礼」ということがあります。浄土真宗では行いませんが、出棺時に茶碗を割るなどの儀礼がかつては行われていました。それは死に対する恐怖といってもよいですし、生きている者が死者と絶縁するという意味も込められていました。遺族の心の中に交錯する愛着と恐怖による、ある意味矛盾した儀礼なのですが、かつては一つの葬送の中で行われてきたのです。

湯灌（ゆかん）と納棺

1977年頃までは、葬儀社社員がご遺体の手足をガーゼや手拭いで清拭していましたが、現在は納棺師が洗顔、顔ぞり、洗髪をしています。死装束を着せる場合もまだありますが、好きだった洋服であるとか着物を着せたりすることもあります。

儀礼としての湯灌のやり方は、水を先に入れた後でお湯を入れ、丁度よい温度にします。反対に

誕生の時の産湯では、先にお湯を入れてから水を差します。生と死は逆の行為になるのです。水を先に入れて湯を後で入れることを、逆さ水といいます。

昭和 30 年代までの湯灌の仕方を三河で調査したことがあります。かつて湯灌は亡くなった方の兄弟が行っていました。家の納戸（寝所）にご遺体を北枕で寝かせて、部屋は閉め切ります。粗筵（あらむしろ）を引いてその上に盥（たらい）と棺を置きます。盥に逆さ水をしてから遺体を座させます。一人がご遺体を支えてもう一人が体を拭きます。それからコウゾリ（頭剃り）といって、昭和 20 年代までは真宗では頭の髪を全部剃っていました。これは他の宗派でも同じようにしていました。なぜそんなことをするのかというと、俗体から法体（出家者）にするという意味がありました。

そして昔は葬儀にはお酒がつきものでした。湯灌の時に飲むお酒を湯灌酒といいましたし、出棺の時にはハバキ酒（脛巾酒）といって酒を飲みました。ハバキは旅に出る時「脛（すね）に巻き付けた布製のもの」のことで。また、土葬の穴を掘る役は大役ですので、一升瓶か二升瓶を持っていったり飲みながら穴を掘ったものです。それは死というものに対抗する儀礼といえます。

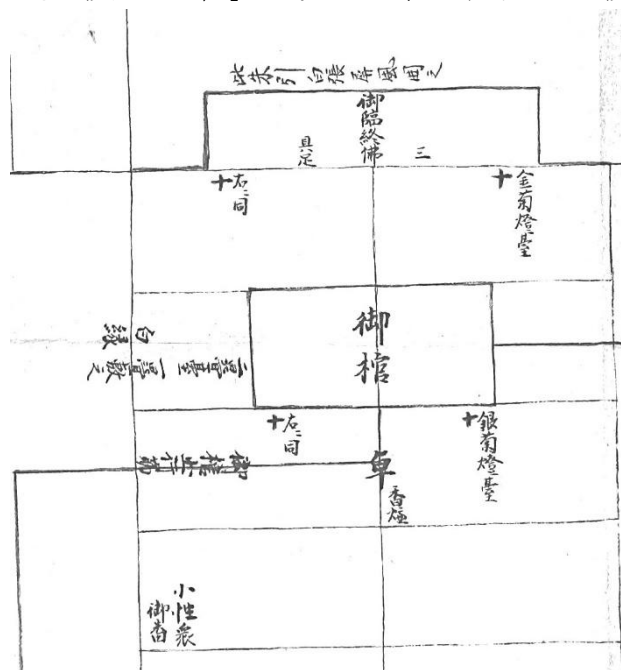
ご遺体安置と本尊・方位

私は枕勤めでのお内仏やご遺体の方位の問題もずっと気になっていました。お釈迦様の亡くなった姿にならって頭北面西（ずほくめんさい）、必ず北枕にしなければならないという考えが一般的です。ですから枕勤めやお通夜で葬儀会館に行きますと、導師の左にご遺体の頭がある場合と、右にある場合があります。ところが日本の文化の中には「仮定の方位」という考え方があるのです。

相撲の土俵の場合を考えてみてください。相撲の場合も「仮定の方位」です。土俵に行司さんが立っている方を向正面（むこうじょうめん）といいます。どの会場へ行っても審判長の座っているとこを正面・北とし、正面から向かって左側が東、右側が西になります。実際の方角とは違いがあるのです。ですから、枕勤めやお通夜の棺の安置の仕方も「仮定の方位」と考えれば、ご本尊を西と仮定してご遺体の頭を向かって右側に安置すれば頭北になり、どのような場所であっても解決することができます。

ご本尊とお荘厳

寛永 11（1671）年に本山の黒書院で執り行われた琢如（たくによ）上人の葬送では、棺を安置して床の間に臨終仏をお掛けしています。真宗では不来迎（ふらいごう、「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」（『執持鈔』より『真宗聖典（第二版）』p. 787）と教えられていますが、大谷家には代々の臨終仏があり実際に掛けられてきたのです。これは諸行往生や来迎仏という考えではなく、死の「作法」なのです。今はほとんど見られなくなりましたが、5 年ほど前までは岐阜県、三重県、特に滋賀県近江、そして福井から新潟にかけても、リンジュウブツ



東本願寺第 14 世 琢如上人葬送の平面図
(大谷大学博物館蔵・栗津家凶事史料「往第廿一号ノ
七 御入棺後黒書院之図 四月九日 栗津蔵書」)

(臨終仏)というご本尊をお寺から借りてきて葬儀をしていました。

琢如上人の葬送では、ご本尊の横に金の菊燈が置かれ、ご遺体の横には銀の菊燈が置かれました。少し離れた場所にご遺体を守る小姓衆御番が配置され、ご遺体は葬儀が終わるまで放置されないのです。現代では枕勤めやお通夜の前後には、ご遺体のそばにご遺族が誰もいないということがあるのですが、かつてはそうではありませんでした。また、焼香卓が棺の頭側に置かれることが多いですが、ご本尊と棺の正面に配置します。これを基本に枕飾りのお荘厳を考えればよいのです。

枕勤めの場とは

私は真夜中でも枕勤めに伺います。枕勤めは葬送開始の儀礼であり、臨終勤行です。そして、そこで亡くなった方のお人柄や仕事、好きだったことなど、どんな人生を送られたのか聞き取りをします。それが法名を選定する際の参考にもなります。

枕勤めの場は、時に修羅場になることもあります。自死された方の院号をつけますかと聞きましたら、高校生であった子どもさんから「なんで今そんなことを言うのですか。そんなものつける必要があるのですか」と食ってかかれたことがありました。交通事故の場合、自死の場合、災害死などの場合、死を静かに考えるなんて悠長なことはいってられない、非常に危機的状況の中での儀礼なのです。

そして、葬儀社と僧侶の役割はそれぞれ異なりますが、通夜と葬儀の日時をお寺・遺族・葬儀社の三者で決めることは守っていただきたいと思います。

遺族が葬送儀礼について何も知らないということが増えているのが現状です。葬儀社は消費者としての遺族の要望に従って多様な形に儀式や荘厳を変えていきますが、葬儀社は本来、税理士や弁護士と同じく代行業という立場でした。かつて隣近所や村の共同体、同行が行っていた葬儀の運営を代行する立場です。今後考えていただきたいのは、「どこまで代行されるのか」ということです。具体的にいえば葬儀の依頼です。今は葬儀社からお寺に依頼が来るようになってきましたが、30年ほど前までは、新しい方でも喪主から直接お寺に連絡がきました。お寺からいえば喪主の依頼があって初めて葬儀が成立できるのです。

葬儀社から「お布施をいくらでお願いします」と言われることもありますが、「はい、分かりました」とお寺がいったら葬儀を買うことになってしまいます。お寺の儀式はそのような形では行いませんし、したくありません。一方、葬儀社にとって葬儀は商品であることは間違いのないことです。そこで、「死は商品でしょうか」と改めて問いかけるとどうでしょうか。やはり「死は商品ではない」。死は人間の尊厳性の問題であり、倫理観が問われることであると思います。枕勤めは、今、命終された人を中心として遺族・僧侶・葬儀社がきちんと話し合いをすることが重要であり、その後に続いていく儀礼が大切な仏縁になるための開始儀礼なのです。

第1章 - 2 参加者の声 （寺＝寺院関係者、葬＝葬儀社、門＝門徒）

1, 「枕勤め」の現状認識と課題について

(A) 枕勤めの現状と意義

- ・[寺] 枕勤めは最初に行う法要なので省いてはいけない。どんな形になるにしろ遺族との関係を構築する大事なご縁となるので、お会いして顔を見なければいけない。
- ・[寺] 枕勤めは、葬儀から還骨勤行まで、ひいてはその後の寺と門徒さんの付き合い方を含め全てを決めてしまうくらい大切な場面だと学んだ。
- ・[寺] 遺族とより深く話ができるのはやはり枕勤めという時と場ではないか。また枕勤めでは、法名を選定するためにしっかりとヒアリングをしている。すでにお寺とのお付き合いが深い方でも、家族しか知らない姿もあるので丁寧に聞いている。遺族みんなが故人の生前について伝え合う中に、大切なことが見えてくる。
- ・[寺] 通夜・葬儀の時間を決めるために赴くのではない。僧侶の姿を見てほっとされる遺族もおられる。
- ・[寺] 住職になって枕勤めにも行くようになり、その場が非常に大切な場なのだと知った。門徒さんや葬儀社さんとの話し合いから見出せることがたくさんあると感じている。
- ・[寺] なぜ今日行われている儀式がこの形なのか疑問に思ってた。枕勤めに関しても、行うことが当然だという意識から出ていなかった。枕勤めの意味を具体的に理解し伝えていくことができていなかった。
- ・[葬] 葬儀社スタッフとしても、枕勤めの場で法名をつけるまでの遺族との会話を聞かせてもらおうと、どのような葬儀にしていくべきかの提案につながる。
- ・[葬] 今回初めて枕勤めの大切さ、深い意味を学んだ。死別という日常と非日常の間にあるご遺族に対する説明の仕方を考えていきたい。
- ・[門] 枕勤めは人生最後の儀式で尊い大切なことである。
- ・[門] 枕勤めは故人と遺族を結ぶ最初の接点。これほど重要な儀式（お勤め）とは知らなかった。

(B) 枕勤めの変容（簡略化や省略とその背景）

- ・[寺] お亡くなりになってすぐに枕勤めできないことが多く、通夜勤行の直前に行くことが多くなった。こちら「手間が省ける」というような感覚になってしまい、それが当たり前になりつつあることを反省している。
- ・[寺] 枕勤めを省略するケースも増えていると聞く。中陰も同様だが、どこに省略する理由があるのか。枕勤めをせずして、その後をどうお付き合いしていくのか。法名はつけられるのか疑問である。
- ・[寺] 親の後ろ姿を見て伝統をつないでいくことが希薄になってきた。その結果、遺族はどのような手順で葬儀を勤めるのかを知らない。手次寺すら分からない方が増えている。よって、家族が亡くなった場合、お寺ではなくまず葬儀社に連絡をされるケースがほとんどである。
- ・[寺] 枕勤めの場所や形式が多様になり、本尊のないケースが増えている。その場合は本尊を持参してご安置し、お参りすべきだと思う。

- ・[葬] 葬儀社から簡略化を勧めているわけではないが、遺族から簡単にできるかどうかの問い合わせはある。月 20 件ほどの事前相談では、一日葬でやりたいという要望は増えてきているように感じる。
- ・[葬] 自宅ではなく会館で枕勤めを行うことが増えている。枕勤めを通夜式と一緒にする場合も増えている。中には必ずそうする寺院もある。
- ・[門] 病院等の死亡が多い時代になり、自宅での最後の枕勤めが少なくなっており、大切な儀式が少なくなった気がします。
- ・[門] 枕勤めのことをよく知らない人が増えてきている。
- ・[門] 葬儀社さんが簡素化しているかと思っていたら、お寺さんの方からの葬儀に付随する儀式を短縮しているとの話もあって驚いた。

2. 儀式と伝統に関する意見

(A) 法名授与

- ・[門] 枕勤めを省略したら、いつ法名を賜うのか疑問に思い、語り合いで質問してみた法名は本人にとって大切なもの。やはり生前に賜りたいものと再認識した。
- ・[門] 生前に法名をいただくことを願っている。
- ・[門] 故人がどんな人だったのかを聞いて法名を考えている篤い心の住職がいて安心した。生前に法名をいただくことを願っている。

(B) 儀式の形式

- ・[葬] 遺体の安置方法は実際の方向と仮定の方位があることを知った。
- ・[葬] おかみそりを行うタイミングが、お寺によって異なっている。

(C) お布施の問題

- ・[寺] 近年、お布施の額で困っている方が多いと感じる。枕勤めに伺った際にまずそういった話をされる方に、真宗の儀式全体を伝えて理解していただくのは大変なことだと感じる。

3. 関係者間の連携と課題

(A) 寺院・葬儀社・門徒の関係性

- ・[寺] 葬儀社との関わり合いを考えなければ、葬儀そのものが出来ない社会はどうか。
- ・[寺] 葬儀社の方にかなり気をつけていただいていることが分かった。他のお寺さんが様々な工夫をされていることを知ることができた。
- ・[寺] 儀式のやり方も大切だが、それ以前に突然のことでも門徒さんが困らないように何でも相談し合える関係を築いていくことが必要。門徒さんは私たちが思っている以上に知らないことが多い。枕勤めに至るまで（普段の月忌参りなど）の門徒さんとの関係づくりが課題と感じている。
- ・[寺] ここ 10 年ほど、深夜 12 時以降に訃報の連絡がかかってくることはなくなった。
- ・[葬] 枕勤めが深夜になってしまう場合、遠慮して朝に連絡をするようになった。

- ・[葬] 現場では、お寺さんによってモチベーションに強弱があり、熱心に取り組んでいただける方もおられれば、そうでない方も多い。
- ・[葬] 寺院様の意向や枕勤めに対しての考え方などを門徒様や葬祭業関係者との繋がりや交流があったらいいなと思いました。
- ・[門] 葬儀については門徒としては葬儀業者さんに頼りがち。何とかお寺様をもっと頼りにすべきと思った。
- ・[門] 手次寺との付き合いが薄れてきた結果、インターネットで葬儀社を探す門徒が増えたのではないかと。それに伴い様々な考えの門徒が増え、インターネットを利用した依頼も増えており、葬儀社もそれぞれ対応に苦慮しておられる。
- ・[門] 葬儀のことを誰に相談してよいのか分からないから、葬儀社さんに相談する。お寺さんに相談してもお寺さんが困るのではないかと考えている。
- ・[門] 寺と葬儀社と遺族との関係は微妙なバランスの上に成り立っている。しかも崩れやすい。
- ・[門] 寺との付き合いが面倒だと感じている人が増えてきているのではないかと。
- ・[門] 地域のことをよく知っている坊守さんとよく話し合う。このことについては坊守さんの研修をやるとよいと思う。

(B) コミュニケーションの重要性

- ・[寺] 門徒にとって寺院は縁遠いものとなり、葬儀社が葬儀の専門家として認識されている。僧侶、遺族、葬儀社がそれぞれの考えをすり合わせていく場が枕勤めということなのではないかと思わされた。
- ・[寺] 枕勤めは必要だという門徒さんの声を聞くことができたのは大きな発見だった。
- ・[葬] お寺様と葬儀社がほぼ同じ考え方と認識しました。一般葬、家族葬、最後の決断のひと押しがお寺様の一言だと思いました。
- ・[葬] 枕勤めの場が宗教儀礼的意味合いだけでなく遺族と寺院側との大切なコミュニケーションの時間でもあると分かり、より一層大事な時間だと感じた。葬祭業としては、遺族の故人に対する「愛着」の部分だけに重きを置いてしまっていないか、過度なパフォーマンスと化していないかと、今一度見直すことが必要と思った。
- ・[門] 何のために枕勤めがあり、そもそもどういう儀式なのかを知識のない遺族に話すことも必要なのではないかと？仏教を葬式仏教ぐらいにしか思っていないような人たちの葬式では特に必要なことだと思う。

(C) 遺族への寄り添いの課題

- ・[寺] 枕勤めの場では、日時などを決めることやお勤めをこなすだけで、遺族の悲しみに寄り添う余裕がなかった。遺族にどのような言葉をかけてどのように出会っていけばいいのだろうか。
- ・[寺] 亡き人、ご遺族に寄り添うことは、どこで関係の修復をしていけばよいのだろうか。関係性の希薄さの中で、数少ない出会いの中でどこまで深めていけるのか。
- ・[寺] 遺族の方の恐怖（死への）に対して少しも寄り添えてない自分の至らなさに気づかされました。

- ・[寺] 枕勤めで初めて対面する人々の苦悩を聞きとることが出来ているのか。それ以前に聞きとろうとしているのか。
- ・[寺] 電話で済ませたりせず「すぐ行きます。夜中でも平気です」くらいの本気度を寺が示すべきだと感じました。

4. 僧侶に対する期待と意見

(A) 僧侶の課題と反省

- ・[寺] ここ 30 年、儀式が次々簡略化されていく中で、枕勤めの意味とは何だろうか。何をすればいいのだろうか。
- ・[寺] 家族葬が多くなったせいか、最後のお別れをすることが出来ず、本当に亡くなったかどうかの実感を持ってない方が増えている。枕勤めの時、親しい人や本当にお別れしたい人にはお知らせくださいと必ず伝えている。
- ・[寺] 門徒、葬儀社との対話不足が課題に感じる。僧侶の質の低下もあると思う。
- ・[寺] 伝えるべきことを伝えないことの無責任さを痛感した。
- ・[寺] やはり丁寧な人間関係を築くしかない。寺と門徒ということだけでなく人と人との丁寧な関係を築いていきたい。
- ・[寺] 門徒さんの悲しみに寄り添うことも真宗の正しい儀式を行うことも、車の車輪のごとく大切なことと思う。具体的にどのようにするのは各寺院での努力が必要と思う。まずは日頃から門徒さんと話し門徒さんや家族とつながっていききたい。
- ・[寺] 枕勤めに始まる葬儀の流れを僧侶からあらかじめ生前に説明をしておくことが必要だと感じた。
- ・[寺] 門徒さんにもっと分かりやすく説明すること、そして亡くなる前から信頼関係を築いていくことが大切だと改めて気づかされた。
- ・[寺] 枕勤めから満中陰法要（忌明け）に至るまでの流れを門徒が知らないのは、伝えていない僧侶側の問題であるとの意見が胸にささった。
- ・[寺] 枕勤め次第でその後の通夜、葬儀も全く別物になる、という責任の重さを感じました。
- ・[寺] 枕勤め、通夜、葬儀、それぞれの意義や意味を自らの言葉で説明することの難しさが改めて課題になった。
- ・[寺] 葬儀の本質をあらためて考えていかなければならないと思う。
- ・[寺] 儀式だけやっておしまいのお寺さんも多々おられるように感じる。それはどうなのだろうか。
- ・[寺] 故人（死）に何を問われ、遺族に何をこたえていくのか。それを考え続けることが僧侶の仕事であって、儀式をするだけではないと思う。
- ・[寺] 形が変わっていくのは仕方がない。しかし、いかにして「真宗の葬儀」という意味を確保するのか。それが中心課題だと思う。

(B) 僧侶に対する要望と意見

- ・[葬] 真宗においての枕勤めは、仏様になった故人のためかご遺族のためか、どちらの比重が

大きいのか？ご遺族とあまり会話をせずは何をもって法名を決めるのか疑問に感じる時がある。枕勤めは、元々は死後ではなく臨終際のお勤めではないのだろうか。

- ・[葬] 遺族の方へ伝えるべきことは、お寺さんからしっかりと伝えてほしい。法要（枕勤め・通夜・葬儀など）の大切さを伝えるのは、葬儀社ではなく僧侶だと思う。
- ・[門] 大切な方を亡くした時には枕勤めなどの儀式が大切であるということを、お寺が普段から伝えていない。お寺側の怠慢ではないか。葬儀社はどんどんとパンフレットなどを送ってくるが、お寺からは儀式などについての広報が全然なされていない。
- ・[門] そもそも普段から門徒と信頼関係を築く努力をしてきたのだろうか。
- ・[門] お寺には壁があり門がある。夕方には門が閉じられる。もっと自由にお寺さんに入ってお参りできるようになりませんか。「お寺さんの排他性」をなくすべきと思う。
- ・[門] 葬儀の一連の流れの中で、儀式とともに僧侶さんから生きる意義、生と死などの話があってほしい。お勤めを聞いているだけでは意味がない。
- ・[門] 何のために葬儀を勤めるのか、その中で枕勤めはどういうお勤めなのか、そのことをお寺さん自身が確かめ直すことが必要ではないか。

第1章 - 3 実行委員の所感・提言

【枕勤め以前の課題】

蒲池先生による講義、班別語り合い、そして講座を終えての振り返りシートでの参加者の意見を伺い、まず「枕勤め以前の課題」が浮かび上がった。

その課題として、普段からの門徒との付き合いが希薄になってきたことが挙げられる。語り合いなどにおいて、門徒から「そもそも枕勤めとは何かがわからない」という意見が多数寄せられたことから、僧侶側からの丁寧な説明が圧倒的に不足していることが窺い知れる。それと同時に、三世代同居がほとんど失われた現代の家庭事情によって、門徒の家庭内での法義相続が困難になっていることも一因だと考えられる。

また、僧侶自身からも枕勤めの歴史や意義について「知らなかった」「考えたこともなかった」などの意見が聞かれたことから、僧侶自身の学びも不十分であることが窺い知れた。「枕勤めとは何か」を問う前に、僧侶自身がまず学び、考え、日常的に門徒に伝えていくことが必要なことだと感じられた。

【枕勤めとは】

蒲池先生が講義されたように、枕勤めはその後の法要へと繋がる大切な「開始儀礼」である。葬送儀礼の端緒として、枕勤めというプライベートな場で亡き人について丁寧に遺族から話を伺うことは、僧侶のみならず葬儀社スタッフのプラン作成にも大いに大切であることが確認された。

また「死は日常か、非日常か」という問題提起もされたが、一方的に法の立場（生死一如／死は日常）から正論を述べるだけでなく、大切な家族を亡くした遺族の複雑な悲嘆感情（愛着と恐怖／死は非日常）に耳を傾けることが大切だという声を多くの参加者から聞くことができた。

真宗は聞法を大切にしている教えである。勤行を通して故人と一緒に最後の聞法をさせていただく場として、枕勤めを丁寧に勤めなければならない。

【その他の課題】

その他にもいくつかの課題が挙げられる。その一つは、帰敬式（おかみそり）をどのタイミングで執り行うのか、ということである。本来、生前に帰敬式が執り行われてきたという意義を踏まえながら、様々なケースに際して一人ひとりがどのような対応をすべきなのかを考え続けなければならない。

また、門徒や葬儀社とのつながりが希薄な点が挙げられる。様々な人たちによって葬送儀礼は形作られるが、そこに関わる者同士がそれぞれの立場からもっと学び合い、語り合っていく必要があるのではないだろうか。

どなたでも
ご参加いただけます

〔第2回〕

通夜について

期日：2024年6月5日（水）

時間：午後3時～6時15分

講師：蒲池勢至氏（長善寺前住職）

発題：椋山正樹氏（教西寺住職）

内容：講義、語り合い、振り返り

定員：80名（先着順）

場所：名古屋教務所 議事堂 ほか

〔連続講座〕

いま、葬儀を考える

“なぜ葬儀を勤めるのか？”

人が亡くなった時に葬儀を執行するという宗教的伝統が崩れ始めている今、それを自明のこととしてきた私たちに、この問いが突きつけられています。その問いに向き合うにあたり、〔第1回〕枕勤め、〔第2回〕通夜、〔第3回〕葬儀のそれぞれの意義、歴史的背景、変遷、そして真宗門徒が今日まで大切に守り、受け継いできた精神を確かめたいと願い、連続講座を開催いたします。

変化の激流の中で、一体何に向き合い、何を守り、伝えていくのか。葬送に関わる僧侶、葬儀社、参列される方が一緒に考える機会です。どうぞご参加ください。



蒲池 勢至 氏

gamaike seishi

1951年愛知県生まれ。元同朋
大学特任教授、真宗大谷派長善
寺前住職、同朋大学仏教文化研
究所研究顧問。

写真：右上 地域共同体で運営されていた火葬場の一例

（『センタージャーナルNo.112』発行：名古屋教区教化センターより）

左上 碧南市蓮成寺

左下 愛知県名古屋市の正賢寺前坊守通夜荘 於：書院

参加費：無料

申込期限：2024年5月末日

必ず事前にお申込みください
（裏面参照）

名古屋市中区橘2-8-55 〒
052-331-2468 ☎

主催：名古屋教区教化委員会
真宗の葬儀実行委員会

第2章 - 1 「通夜について」 講義抄録（講師：蒲池勢至氏）

なぜ通夜を勤めるのか

今回は「通夜」についての講義になりますが、「なぜ通夜を勤めるのか。一日葬ではなぜいけないのか」という簡単な疑問ほど難しい問題なのです。法要を執行する寺院としては、葬儀の規模が大きくても小さくても、一日葬であったとしてもほとんど変わりません。お布施に関しても経済的に困難な状況の方は仕方ありません。

92歳のおばあさんがコロナで亡くなられた時のことです。亡くなられて一カ月ほど後に息子さんからお寺に電話がかかってきて、驚いて飛んでいきましたら、すでにお骨が置かれているだけの状態でした。「何もせずに、このままではいけないのではないか」という声が親戚から出て、お寺に連絡をしたということでした。法名もありませんし、枕勤め・通夜・葬儀も何もしていない。満中陰にあたる時期にようやく連絡がきたのでした。

また、別のご門徒からは「実は父が亡くなったのですが遠方ということもあり、お寺さんなしで葬儀をすませました」と連絡がきたことがありました。しかし「これで本当にいいのか」という思いがあって、「法名をいただいてお参りしてほしい」というご相談でした。このような事例から「なぜ枕勤めや通夜が必要なのか」を考えますと、それは簡略化することで人としてなすべき基本的なことが欠落してしまうからです。つまり死者の尊厳性、遺族の人間としての尊厳性、ご遺体の尊厳性がそれぞれあるのです。命終を迎えたばかりの人は、まだ「曖昧な死」の状態です。ご遺体というのはこれまで幾多の時間を共にした人でありつつ、もう人の身ではない、という存在の曖昧さがあるのです。そのような曖昧さに対して葬送儀礼を通すことによって向き合い、それぞれの尊厳を回復する仏縁となるのです。

葬送儀礼の期間

「儀礼」というのは「儀式」とは違います。私たちが「地域の中で代々行ってきた行為、受け継がれてきた行為」というのが儀礼の定義です。そう考えますと、葬送儀礼の期間というのは長いのです。

死の間際とは、医者から死の宣告を受けるとか、治る見込みがない状態です。普段とは違う時間と空間になって死が迫ってくる切迫感があります。その後、命終です。もう指一本動かさない。一声も聞けない。病院では遺体の処置をして、2時間ぐらいの内には出ていかなければならない。直後の儀礼として、かつて末期の水・湯灌・死装束などがありました。そして葬送の準備があり、お通夜になるわけです。

通夜というのは葬儀の前日、真宗儀式からするとお逮夜（オタイヤ）になるわけです。そして葬儀式・茶毘・拾骨・野帰・還骨・中陰から満中陰（忌明け）となりますが、もう少し長いスパンで考えますと、一周忌を過ぎて三回忌までが仏教でいう葬送儀礼としての一連の儀式です。死の間際から三回忌というこれだけ長い期間が葬送儀礼ということになります。

葬送儀礼の構成

葬送儀礼の構成について申しますと、まず民俗学的な葬送儀礼の用語でいう「蘇生儀礼」という

亡くなった方への愛着をあらわす儀礼、そして「絶縁儀礼」という死に対する恐怖があらわれた儀礼が行われます。真宗門徒はこれを行わないといわれますが、かつて愛西市などでは絶縁儀礼として出棺をする時、棺の下に敷いてあった筵（むしろ）を叩いたり、他のところではカリモン（仮門）といって竹のアーチを作って棺をくぐらせました。

次に「成仏儀礼」は真宗的にいえば往生儀礼に該当します。これは「葬の儀式」です。昔は「葬式」と言い方はしていませんでした。「葬」の一字で「はふり」といいます。「はふる」というのは「放る」という意味で、ご遺体を移動させて処理することを指します。それが「葬の儀式」です。これは儀礼ではなく、仏教的儀式です。そして次に「追善儀礼」として、中陰や年忌法要があります。

一般的にみると、儀礼の中に儀式があります。良い悪いは別として、儀礼の中には雑多なものが含まれているのです。儀式（ceremony）の定義とは、宗教団体とか国家とか社会にある考えに基づいて行われるのが儀式です。例えば8月15日の戦没者追悼式は、国家の考えに基づいた慰霊の儀式です。しかし、儀式以外のものが葬送儀礼の中には数多く含まれています。儀礼をすべて儀式として解釈しようとすると、現実と乖離します。平成の初め頃までは、「枕飯」や「枕団子」など色々なものが供えられました。これは真宗の儀式からすれば必要ないものですが、なくならなかったのです。

儀礼はプロセス

葬送儀礼というのは一連のくり返しの儀礼です。それを分けると、蘇生儀礼・絶縁儀礼・成仏儀礼（往生儀礼）・追善儀礼となります。儀礼は竹の節だと表現されます。節（儀礼）を一つ越えるごとに次の段階に移っていくのです。これは「死の確認と受容」や「非日常から日常」へ復帰していく心の変化、状況の変化、時間の経過などを、段階を踏んで行っていくプロセスであり、それが儀礼の本質といえます。ですので、そのプロセスを簡略化しすぎると人間の方が対応しきれず、「これでいいのか」「何かおかしい」という感情が芽生えてしまうのです。儀礼を繰り返すことによって、死者と生者の尊厳を失うことなく、曖昧であった死が段々と受容されていくことが大切なのです。

かつての通夜では

下の資料は、平成10年～15年（1998～2003）に『愛知県史』編纂の仕事で愛知県内の通夜を調査した事例です。通夜は住職でなく、家族・親戚・お講など地域で勤められていたことが分かります。

- ・ツヤは子ども兄弟が行う。あくる夜のツヤは親戚が行う。イトウも集まる（安城市河野町）
- ・死者の枕元には香炉に線香を折って焚いた。昔は一本立てるものだった（安城福釜町）
- ・死者には魔除けとして、剃刀や脇差など枕元に供える（一宮大和町妙興寺）
- ・通夜の時には遺体は棺に納めてあり、奥の座敷に筵を敷いて安置した。通夜の間は娘や兄弟がついてお守りをし、家の者は寝ないで線香が絶えないように番をしている（稲沢市片原一色）
- ・湯灌中に枕元で瓦の上にかがり火を焚き、お通夜をする（稲沢市法花寺）
- ・枕経を早くあげると、夜は講の人が来て喪主になってオチョウシ（調声）をあげ、お勤めをしてくれた（海部郡立田村山路）

同行組織（講）があった頃は、住職は通夜に行かずに門徒のみで勤めていたことが分かります。かつては毎月のお講が開かれ、「白骨の御文」も門徒さんが拝読していましたが、次第に同行組織が失われ、自分たちで通夜を執り行うことができなくなってしまったのです。

「私」と「公」

住職がなぜ通夜に関与しなかったかといえば、通夜は私的なものであり、儀式ではなかったからです。だから通夜の翌日から精進に入りました。仏事だから精進なのです。通夜の翌日の葬儀の時に精進に入ったのです。

通夜の時には、近親者が死者に添い寝をして、死者について語り合いました。みんなが「寂し見舞い（遺族を慰めるための菓子や飲み物）」を持ち寄って、それを弔問者に出して一緒に食べて話をしました。このことは、死者との「食い別れ（死者との別れの食事）」の意味合いも含まれます。葬儀前の食事を「出立ち」といいますが、これも死者との食い別れです。通夜の中のこれらの儀礼の大事なことは、遺体に寄り添うということと語り合うということであり、別の意味では、ご遺体を守る、守護するということが重要なことでした。今、こうした通夜の儀礼は消滅しました。

通夜の変化

同行や家族中心に行われていた通夜勤行が平成以後できなくなり、葬儀会館で本葬儀式と変わらない形で通夜勤行が行われるようになりました。平成初期の通夜には、50人～100人ぐらいの参列も珍しくありませんでしたし、本葬儀式より通夜の方が多かったです。それがコロナ禍を経て家族葬や通夜も行わない一日葬という形も多くなってきているのが現状です。

かつての同行中心の通夜では、「正信偈」をみんなで勤めました。住職が行くようになってからも、みんなで読んでいました。ところが場所が葬儀会館が変わって参列者も多くなり、焼香も時間がかかるため、「正信偈」をみんなで勤めにくくなりました。しかし現在、葬儀が縮小化されたために参詣者が少なくなり、もう一度「正信偈」を家族と勤められる状況になってきたと思います。

通夜の次第と法話

私が勤めている通夜の次第では、まず「剃髪の儀を行います」といって帰敬式を行います。帰敬式は枕勤めの時に行うことが本来かもしれませんが、枕勤めの時にはまだ法名が選定されていない場合もありますので、私は通夜の時に行っています。

次に『真宗表白集一』や『真宗表白集二』（法蔵館刊）の中から選んで通夜の表白を拝読します。表白の次に、「正信偈」の勤行をします。勤行の後に、参詣者へ向き直って法話をします。その時どのような話をするのが大事になります。

まず「それおもんみれば 等しくこの世に生を享くるも 花の生涯あり、 困苦の一生あり 長寿あり 短命あり 長く患いて死するあり 突然の逝去あり まこと人の生命はさまざまなりというべし（以下、略）」と表白の一節を読み上げます。もちろん暗記です。そして、「〇月〇日に〇〇さんが命終の時を迎えられました」とはっきりと明言します。さらに、表白の言葉をくり返しながら、皆一生懸命生きてきましたけれども「花の生涯」の方はおられず、必ず何かで苦労されてきたということ。「長寿あり短命あり」のところでは、何月何日何時何分何歳で亡くなりましたということを伝えます。そこから、その人がどういう人であったのかを話します。何か一つでも記憶があれば話が出来ますが、初めての方はどうするかといえば、枕勤めでのやり取りの中で家族との関係であるとか、どんな病気を患っておられたとか、聞き取りしたことを話します。「突然の逝去あり」、死は最後の最後まで突然です。医者でも何時何分に命終することは分かりません。最後に法名の説明を

します。そして、本尊に向き直り「一緒にお念仏をしましょう」と言います。ところが今は残念なことにお念仏の声が聞こえてきません。

真宗の葬儀

真宗の葬儀とは何か、解釈はいろいろあるでしょう。けれども、私の考えでは「南無阿弥陀仏」の声が聞こえることです。念仏の声が聞こえる葬儀。また、「正信偈」を皆で唱和できる葬儀です。そして、一人ひとりの信心。この三つがそろえば真宗の葬儀ができるはずです。それをどうすれば実現できるかを考えていただきたい。僧侶だけで集まって話しても、もうどうにもならないところまで来ています。これから 5 年もすればまたゴロっと変わっているでしょう。今が最後のチャンスだと思います。

第2章 - 2 参加者の声 （寺＝寺院関係者、葬＝葬儀社、門＝門徒）

1, 「通夜」の現状認識と課題について

(A) 通夜の意義と変容

- ・[寺] 枕勤めから始まり、通夜を通して「別れ」を確たるものと感じてもらえるように勤めなければならない。
- ・[寺] そもそもお通夜がどういった理由でいつから始まったのかは分からないが、先生の講義で故人について語り合う、寄り添う、守護すると学んだ。目の前には遺体があり、翌日には火葬される現実があるが、なかなか死についての受け止めが難しい。遺族にとってこの現実が「曖昧な死」であることを十分に理解する必要がある。
- ・[寺] 「一日葬」「直葬」という言葉によって、葬儀の主流がその方向に仕向けられていく。これらは多死社会を見越して、数多く葬儀を行うために作られた造語ではないか。こういう言葉を使わないことも必要なことだと思う。
- ・[寺] 最近では一日葬が多くなり、その結果、通夜が省かれる事態が現れている。
- ・[寺] 文化としてある通夜に、どうやって「真宗の願い」を含ませられるか。「正信偈」の声が聞こえない以前に通夜自体が無くなりつつある。いかに通夜を存続していくことができるのかが課題。
- ・[葬] お通夜は「夜を通す」とお話しされた僧侶がいた。通夜式といった言い方をするとその時間だけのことになるが、葬儀スタッフとしても、遺族は儀式が終わっても夜通しで故人に寄り添っているのだと意識するようになった。
- ・[葬] なぜ通夜をしなければならないのかが疑問でした。それは死者への尊厳性、遺族の尊厳性を守ること、死者への礼であると学んだ。
- ・[葬] これまでは通夜というのは弔問する方がみえるから行うものと思ってきたが、大切なことは弔問される方と故人がどのような関わりを持っていたのかを知ることかもしれないと感じた。
- ・[門] 通夜とは最後に亡くなった方と過ごす大切な時間だと思う。
- ・[門] 通夜はその名称通り、夜通し親族が語り合う場として大切。
- ・[門] 通夜の場合は家族の思いが一致してあたたかい場にしたい。

(B) 地域社会との関わり

- ・[寺] 20年ほど前は地域に講が残っていて、通夜には僧侶を呼ばずに同行だけで通夜を勤めていた。司会進行や係も地域の方で執り行い、地域ぐるみで葬儀を行っていた。
- ・[寺] お通夜では、地域によっては胡椒汁や赤飯を出していた地域もある。
- ・[寺] かつては通夜ぶるまい（通夜の後の弔問客をもてなす食事）があって、親戚や地域の人たちが食事をしながら故人のことを思い出し、語り、考えていた。そういう時間がそぎ落とされてきてしまった。
- ・[寺] 地域のお同行のつながりがほとんどなくなってしまったことを痛感している。
- ・[門] 若い方が亡くなられて50人ほどの知人、恩師が集まった式を勤めた時、ご家族が亡くなった人の新たな一面をお悔やみの方々から知らされる場に居合わせたことがあった。

(C) 葬儀依頼の形態変化

- ・[寺] 近年、門徒からではなく葬儀社から直接依頼の連絡が入ることが多くなってきたが、インターネット仲介業者の葬儀プランの中には通夜が含まれていないこともある。
- ・[寺] 近頃では、自坊の門徒だからといって当たり前前に葬儀を頼まれると思っていたらだめだと実感している。

(D) コロナ禍の影響

- ・[寺] 通夜の前に焼香をしておく事前焼香（通夜前焼香）がコロナ対策から定着している。4年前始まったものが今もなお続いている。なるべく多くの縁者に参ってもらうことを勧めているが家族葬中心になってしまった。
- ・[寺] コロナ前は通夜に参列者が多かったが、今や家族葬がほとんどで通夜も少人数。葬儀を勤めると後の儀式はしないことも増えたと感じる。
- ・[葬] コロナですっかり変わってしまったが、故人や喪家と縁のあった人々が集まる通夜が理想だと思います。そのためには葬儀社や寺院から、人が集まることによるメリットを伝えていかなければいけないと思う。

2. 法話に関する意見

(A) 法話の意義と実践

- ・[寺] 参詣者の聞く姿勢が整っている通夜の最後には、必ず法話を行う。名古屋市内の斎場では「お話はされますか？」と訊かれるが、「はい、いたします」と応えると担当者に嫌な顔をされることがある。時間が延びるので葬儀社からは嫌がられる。
- ・[寺] 法話は勤行前にしている。焼香は勤行後に。合掌して「お念仏を申しましょう」と勧めながら通夜勤行をしている。
- ・[寺] 死を縁とする通夜の場合での法話は、その人の人柄、人生、人間関係を伝えたり、葬儀の意義や人間として生きることの意義などについて語る事が大事なのではないか。
- ・[寺] 私はまだお通夜を執行したことはないが、蒲池先生から「法を説くのではなく、法縁の門扉を開く」と教えられた。ご門徒さんとお寺、私との関係をつくっていくことと、自分が承った感動を語っていく。そのような「つながり」と「自分を語る」ことを心掛けていきたい。
- ・[寺] 法話において「故人がどういう人であったか」を皆で共有することの大切さを痛感した。
- ・[寺] 門徒さんからの「通夜場で子や孫たちに話を聞かせてほしい」という意見を聞き、これまで自分が大切にしてきたことが間違いではなかったと勇気づけられた。
- ・[葬] お経の前にどのような意味のお経なのかを参列者の方に説明してからお勤めされるお寺様があって、よい取り組みだと感じた。
- ・[葬] お孫さんからお祖母ちゃんへ送られた弔辞が心に残っている。通夜・葬儀が亡くなられた方に対して思いを告げる場になったらいいなと思う。
- ・[門] 印象に残っている通夜はやはりお坊さんが法話をされた時。お坊さんはこういう話をするのだと感動したし、また聞きたいと思った。

- ・[門] 通夜に限らず、お勤めをする前に法話をするお寺様もみえる。逆にお勤めすることによって、法話を聴ける体制を整えてからお話しするのもよいと感じる。

(B) 法話への抵抗・課題

- ・[寺] 法話をする気にはならない。真宗の葬儀形式に厳格にはこだわっていない。
- ・[寺] 通夜の場合は「あえて」法話をしない場合もある。その際、還骨の時などに法話をする。自死や若い人の死のケースでは画一的に話ができないため、臨機応変に対応している。
- ・[寺] コロナ前は通夜に参列者が多かったが、今や家族葬がほとんどで通夜も少人数。だから法話は通夜ではなく、じっくりお話できる還骨初七日の時にしている。
- ・[寺] 「法縁の門扉を開く」ということは大切だと思うが、具体的に通夜の法話で何を話したらよいか分からない。
- ・[寺] 通夜の中で法話が必要なのかどうか、それが自分の中ではまだ疑問です。
- ・[寺] そんなつもりもないと思っている法話でも人を傷つけている可能性はいつでも多分にある。
- ・[葬] 法話をするお寺様は3割ぐらいに感じています。通夜だけでなく還骨勤行の時に話される方もおられます。話されるタイミングや長さはまちまちなのが現状です。
- ・[門] 故人や死別に関係のない話や、長くて内容の同じ法話は正直うんざりする。

3. 儀式と伝統の継承に関する意見

(A) 正信偈と唱和

- ・[寺] かつてはお通夜のお勤めが始まると焼香は止められた。またはお勤め中は避けられた。それは地域の人みんなで「正信偈」をお勤めしていたから。しかし次第にお通夜の中で焼香が行われるようになった。
- ・[寺] 葬儀よりも通夜の参詣が多い。他宗派の方々も弔問されているので、「正信偈」を節を付けずに勤めている。そうすることで一緒に読んでくださる。「下手でもいいので読んでください」と勧めている。
- ・[寺] 通夜の際に同朋唱和を全員に促すが、ともに唱和される方が減ってきた。月忌参りで子どもたちと一緒に唱和することを大切にしているのは、耳の底に留まるということがあるため。未来を見据えて今から種を蒔いておくことも僧侶の役割だと思う。
- ・[寺] 現在、「正信偈」を読める方が少ないという前提に立ってみると、通夜で「正信偈」を唱和することは唱和できない人のことを置いてきぼりにしているのではないか。どのような取り組みで同朋唱和を伝承していくのか、考える時期にきている。
- ・[寺] 枕勤めから通夜、葬儀、還骨勤行までをきちんと勤める中で、「正信偈」を集まった皆で唱和する。そういった大事なことを伝えることが僧侶の役割だと思う。
- ・[門] 子どもたちがお寺の子ども会に参加して「正信偈」を大きい声で読めるようになった。お爺ちゃんの通夜では、その子どもたちが心を込めて大きな声で勤めてくれた。子どもの声が通夜の間を豊かな場にしてくれた。
- ・[門] 「正信偈」を同朋唱和で、みんなで声を出してお勤めすることが大事。その後、亡き人の死を縁として生きることの意義を伝えることはもっと大事。

(B) 本尊中心の葬儀

- ・[寺] 住職の仲間内で葬儀についての学習会を行ない、「本尊」を中心とした葬儀を行うことを大事にしてきた。200代の本尊を式場に御安置するように心掛けてきた。遺影中心の葬儀から本尊中心の葬儀となることを願っている。

4. 葬儀社・門徒・僧侶の関係性

(A) 通夜の意味を理解するための情報提供の必要性

- ・[葬] 葬儀への参列は仕事の都合もあり少人数で、通夜が告別式化している。葬儀の位置づけの伝え方を再考し、世間に伝える必要性を感じる。
- ・[葬] 施主、僧侶、葬儀社三者の事前相談も有効だと思う。
- ・[門] 義理で行くのが葬儀だと思っていた。死というものに触れる通夜・葬儀の意味は、親も含め誰も教えてくれなかった。しかし、年を重ねて死を考えるようになってそういうことを聞きたいと思う。
- ・[門] できるだけ多勢の縁ある方で送るという風潮に戻ってほしいと切に願います。

(B) コミュニケーションの重要性

- ・[寺] もともとの同行と新規に紹介された遺族との対応は当然異なってくる。念仏を喜んでいける方向を考えるのが僧侶の仕事だと考えているが、自分の判断だけでは横柄にも感じる。慮りすぎず、伝えるべきことは伝える責任が僧侶にはあるのではないかな。
- ・[葬] ご家族とお寺様の葬儀に対する温度差の違いをととても感じる。
- ・[葬] お寺様と門徒さんたちそれぞれの話を聞いていると、人とつながりたいという部分で根本的に一緒なのだと感じました。
- ・[葬] 最近、葬儀社による事前相談に来られる方が多いが、できればお寺様の方に事前相談をしてもらえる環境があるといいと思う。
- ・[門] 門徒の立場として、門徒全般に葬儀の意味が伝わっていないと思う。
- ・[門] 門徒とお寺の関係を常日頃からきちんとし、対話することが大切。それに尽きる。

5. 僧侶の役割と期待

- ・[寺] 葬儀社と繋がっている僧侶は葬儀社に対して言いなりで何も言えないと聞く。こちらの要望を言って繋がりが絶たれることを恐れる。本当に大切なことを語ることが僧侶の立場であり役割ではないだろうか。
- ・[寺] 分断された時だからこそ、葬儀社・門徒・僧侶三者が一緒に死を縁とした葬送を語り合うことが大事である。
- ・[寺] 「通夜をやらない」という家族にもきちんと説明して通夜を執行したことがある。ある意味で言いなりにならない。
- ・[寺] 人と人とのつながりを再認識してもらえるような話を煙たがられてもしていきたい。
- ・[門] 門徒と寺との間に、気軽に相談できるようなつながりが無い。聞くことができる関係を築くこともこれからの課題ではないかと感じる。
- ・[門] 僧侶の存在意義が薄まっている。結論は僧侶がしっかりしてほしいと願う。

- ・[門] 通夜はその名称通り、夜通し近親者が故人を偲んで語り合う場として大切。そのためには僧侶には故人のパーソナルな部分を語ってほしいが、現状ではそうになっていない。
- ・[門] 葬儀社をリードしていく僧侶になってほしい。
- ・[門] 通夜・葬儀の必要性を伝える啓蒙活動が不足していると感じている。

第2章 - 3 実行委員の所感・提言

【かつての通夜とその変容】

かつて葬送儀礼は地域共同体、特に真宗門徒では村の中に組織されていた講組によって執り行われていた。通夜には基本的に僧侶は参加せず、講組や同行によって「正信偈」が唱和され、その後は通夜ぶるまいをしながら故人との思い出などを夜通し語り合っていた。

その後、故人宅のお内仏や寺院で勤められていた通夜が、次第に葬儀会館に移行していくにしたがい、僧侶を中心とした儀式に変化していった。また、ただ葬具を誂えていた葬儀社も場所や祭壇の設置、遺体の搬送・保全のほか、火葬に至るまでの各種手続きを担うようになってきた。

このような会場と儀式の構成者の変化により、僧侶による法話がなされる機会が生まれたというメリットがある一方で、「正信偈」を読める参列者が減少したなどのマイナスの変化も生まれている。何よりその変化は、そこに身を置く者の意識に大きな変化をもたらすものであったといえる。

【僧侶の葛藤と課題】

そのような変化の中で、多くの僧侶は通夜が大切な仏縁であることを理解しつつも、法話の内容・意義・タイミング・遺族との向き合い方について悩んでいることがわかった。僧侶からは儀式の意義、本尊論、グリーフケアなどを学ぶ機会が求められており、今後必要な教化施策といえる。

また通夜の変化や講組の喪失によって、これまで自然に身についてきた「正信偈」唱和の機会が失われてしまった。念仏・和讃の六首引きどころか「正信偈」さえ耳にしたことがない門徒が増えているのが現状である。いかに寺院がともに勤めを唱和しお念仏を申し合う場を創造していくのかという点に、同朋教団の未来がかかっている。

【今後の展望】

今なお少子化や地域のつながりの希薄化は進行中であり、コロナ対策を経て、家族葬や一日葬、直葬が増加傾向にある。それに伴い、葬儀会館の形態も小規模化し、荘厳にも新たな変化が見られるようになった。

その変化については蒲池先生から講義で指摘されているが、葬儀社スタッフの意識や関心が異なる中で遺族や故人のニーズに合わせた「人間中心のお飾り」になり、一つひとつの荘厳の宗教的意味が見失われつつあるという問題を生み出している。それにより、かつて葬送儀礼そのものが有していた意義や役割が失われ、「死を受け止め、いのちを考える場」の存続が危ぶまれている。

遺族にとって、故人を生者とも死者とも受け止めきれないタイミングである通夜の場において、そこに身を置く僧侶は何のために、何を行い、何を語るのか。各々が今一度問い直すことは喫緊の課題である。

どなたでも
ご参加いただけます

〔第3回〕 葬儀について

期日：2024年10月18日（金）

時間：午後3時～6時15分

講師：蒲池勢至氏（長善寺前住職）

発題：榎山正樹氏（教西寺住職）

内容：講義、語り合い、振り返り

定員：80名（先着順）

場所：名古屋教務所 議事堂 ほか

〔連続講座〕 いま、葬儀を考える

“なぜ葬儀を勤めるのか？”

人が亡くなった時に葬儀を執行するという宗教的伝統が崩れ始めている今、それを自明のこととしてきた私たちに、この問いが突きつけられています。その問いに向き合うにあたり、〔第1回〕枕勤め、〔第2回〕通夜、〔第3回〕葬儀として、それぞれの意義、歴史的背景、変遷、そして真宗門徒が今日まで大切に守り、受け継いできた精神を確かめたいと願い、連続講座を開催いたします。

変化の激流の中で、一体何に向き合い、何を守り、伝えていくのか。葬送に関わる僧侶、葬儀社、参列される方が一緒に考える機会です。どうぞご参加ください。



蒲池 勢至 氏

gamaike seishi

1951年愛知県生まれ。元同朋大学特任教授、真宗大谷派長善寺前住職、同朋大学仏教文化研究所研究顧問。

写真：右上 親鸞聖人が茶毘に付される場面が描かれている

（『御絵伝』洛陽遷化の段 名古屋別院蔵）

左上 1922（大正11）年、名古屋での最初の霊柩車ビム号 於：名古屋別院

（『一柳葬具總本店創業百年史』より 発行：一柳葬具總本店）

左下 名古屋別院元輪番 瀬尾順證氏 葬儀荘厳 於：名古屋別院対面所

参加費：無料
申込期限：2024年9月末日
必ず事前にお申込みください
（裏面参照）

名古屋市中区橋2-8-55 〒
052-331-2468 ☎

主催：名古屋教区教化委員会
真宗の葬儀実行委員会

第3章 - 1 講義抄録 「葬儀について」（講師：蒲池勢至氏）

はじめに

「いま、葬儀を考える」というテーマのもと、枕勤め、通夜と講座を続けてきましたが、今回は最後の「葬儀について」となります。葬儀についてお話しするにあたって、サブタイトルを「世俗化された社会の中で」といたしました。「世俗化」ということがキーワードになりますが、やはり世俗の中に生きていますと、何が真実で何が世俗なのか、分からなくなってしまいます。あえて分かりやすく「世俗化」の定義をするならば、「人間として行う一つひとつの行為の意味が失われ、宗教的な意味が失われていくこと」といえるかと思います。

30年前の葬儀と現在の葬儀は全く違ってしています。かつて私はそこに連続性があるのではないかと考えていましたが、全く異なったものに変化してしまった、と結論付けました。人が命終を迎えるということは変わりませんが、死別を取り巻く環境や行為、葬儀に関わる人の思いなどが世俗化されてしまっているのです。その中で、僧侶自身もどうやって葬儀を執り行っていくのか、そこにどのような意味があるのかを見失ってしまっています。ご門徒にとっても同じであります。また、葬儀社の方にとっては企業として、ビジネスとして葬儀に携わっていただいているのですが、僧侶側とは考え方の違う部分も当然あることだと思います。

葬儀の世俗化

私の過去の経験なのですが、ある葬儀社で行った葬儀の際、棺の上に遺品や酒や花が置いてありました。それに対して私が、「棺の上にこのような物を置くものではないですよ」と伝えたところ、若い担当者が「故人様のものですから」といって怪訝な顔をされました。また別の葬儀では、故人が好きだった丼飯が棺の中に入っていたこともありましたが、これは故人の好きだったものをお供えするという考えなのですが、棺の本当の意味が失われているのだと思います。

棺の意味をもう少し大切にしてほしいと思います。真宗では棺覆い（かんおおい）といって棺の上に七条袈裟を置きます。真宗高田派では野袈裟で棺を被い、棺巻（かんまき）で棺を覆います。また、一番意味がはっきり分かるのは、かつて棺に天蓋（てんがい）を被せていたことです。天蓋とは仏の頭上を覆うためのものです。つまり棺に袈裟を掛けたり棺巻で覆ったり天蓋を被せるということは、「亡くなった方を仏とみている」ということを表しているのです。ですから生前、世俗の中で生きていた故人が好きだったものを供える、という考え方とは全く違っていたのです。

最近の葬儀で献花の前に蠟燭が三つずつ置かれていることがあります。これはロクドウ（六道）を崩したものと思われませんが、本来のロクドウの意味は、六道輪廻の六道です。この写真（図1）は1619年の葬場図ですが、六道は野卓（のじょく）から火屋（ひや）にかけて、左右に三本ずつ立てられていたことが分かります。しかし現在では、六道を超えて仏さまになったという意味が失われ、ただの装飾になってしまいました。

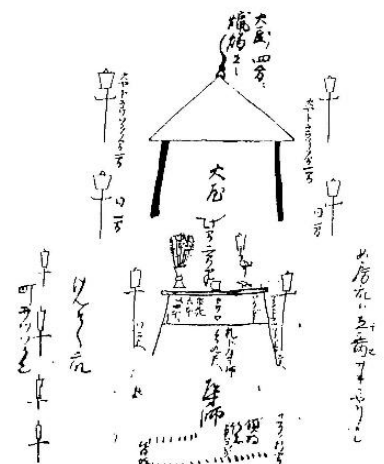


図1 葬場図（蒲池『真宗民俗史論』
「浄照寺記録」より）

櫛塔（しきみとう）についても同じことがいえます。これは真宗佛光寺派門主の葬場図です（図2）。出棺勤行をして本山を出まして、京都国立博物館の辺りにあった火葬場へ路念仏を唱え、鈴を打ちながらやってきます。そしてこの図の「青門」と書いてある門をくぐって葬場に入りました。櫛塔とは、この青門に該当します。ですから、櫛塔の本来の意味とは「門」なのです。最近では葬儀会館内の祭壇の横に櫛塔が置かれているのをよく見ますが、それでは門としての意味が失われて、ただの装飾になってしまいます。これらの事例だけではなく、葬具が本来の意味を喪失してしまった中で、葬儀が執り行われている現状を目の当たりにします。

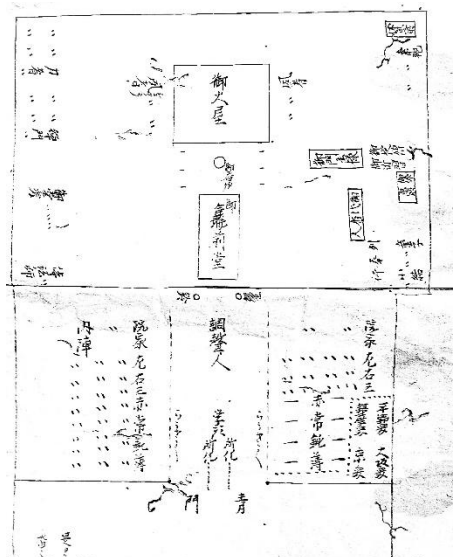


図2 真宗佛光寺派第21世寛如上人葬場図（佛光寺所蔵）

なぜこのようなことが起こるかという、「人間が人間だけでやっていく。現代の問題はそこにある」という安田理深先生（1900～1982）の言葉に象徴されるように、自分たちの都合のよいように推し量って行っていくからだと考えます。そうやって様々なことが本来の意味を喪失し、世俗化してしまいました。

荘厳の混乱

この会場にもご本尊が安置され、前卓に花瓶・香炉・燭台が置かれていますが、寺院の内陣やお内仏のすがたを「荘厳（しょうごん）」といいます。お荘厳は葬儀においても同様なのですが、現状では単なる装飾になり、混乱しています。

あるお通夜に行った時、卓の上の花瓶に櫛ではなくて四華花（しかばな）が挿してありました。私は、「四華花は葬場勤行の時だけに用いるものですよ」と葬儀担当者に伝えましたら、「他のご住職は何もおっしゃられません」と言われました。以前は枕勤めから棺前勤行までは自宅で勤め、葬場勤行は火葬場で勤めていましたが、今は全て同じ場所で行うようになったために起こっている荘厳の混乱だと思います。

また、葬儀の色は白色です。現代では喪服は黒ですが、かつては白でした。葬儀に白色を用いる歴史はインドから始まり、スリランカ、中央アジアを経て、朝鮮、日本へと伝わってきました。日本でも平安時代から白を用いています。また卓などは白木造りでした。ところが最近では、天板がプラスチック素材であるスケルトンの卓も見受けられるようになっていきます。どうしてこのような卓にしたのかと聞くと、「中の色花が見えるように」と答えられました。また祭壇の後ろの幕が開き、屋外の景色が見える演出になっていることもありました。まさに一つひとつの葬具が意味や歴史を喪失してしまい、世俗化した装飾品になってしまっています。お荘厳は装飾品ではないのです。

儀礼の持つ意味

最近の葬儀社の動向として、喪主を必要としない葬儀が提案されています。これは身寄りがない高齢者や、身寄りがないでも頼ることができないケースが増えたためですが、故人に子どもがいても葬儀を行わず、亡くなる前から司法書士や行政書士と連携して生前の保険や財産の管理、また死後

の事務的な処理や連絡代行などを委託することが提案されることもあります。

私は、あまりに人任せにするのはよくないのではないかと思います。喪主の方に対して、「火葬場に行った際に係りの方から火葬開始の点火のボタンを押されるか聞かれたなら、是非ご自分で押してみてください」と伝えます。なぜなら昔は必ず喪主が点火をしていたのです。火葬場から帰ってきた喪主に感想を聞きましたら、「厳しいですね。死刑執行のボタンみたいでした」とおっしゃっていました。ただボタンを押すだけなのですが、非常に重い行為なのです。これが一つの儀礼でもあるのです。

例えば現在、ガザの戦闘で亡くなられた人たちがそのまま放り出されている、またウクライナでは戦闘で亡くなった方が路上に散乱していると報道されていました。“死体”というのは、そこに往生浄土などの世界がないのです。そこでは人間の尊厳性が失われ、ご遺体ではなく死体として扱われてしまっている。

昔はトモヤキといって同行が火葬を行っていましたが、まさに人間が火葬されるところまで確認し、お骨を拾っていました。こういうところまで、自分たちで行っていたのです。そういった儀礼を通して、死者や残された遺族のいのちの尊厳を見出していくことになるのです。

葬儀の社会性の喪失

また、家族だけの葬儀の時、献花に「喪主」と書いてあったことがありました。それを見て、葬儀社の担当者に「おかしいではありませんか」と伝えると「気づきましたか」といわれました。本来、喪主は会葬者の献花を受ける立場です。親族や孫は献花を出しますが、喪主が出すことはありません。つまり、故人の死や葬儀ということの公的な意味合いが失われて、私的なことになってしまったということです。

一人の人が亡くなるということ、死は社会性・地域性を持っていました。なぜなら、かつての地域は、そこに所属する一人ひとりによって成り立っていたからです。葬儀には、その人が地域から失われたことの告知、そしてその喪失を地域全体で補っていくことを周知する意味がありました。だから、普段「村八分」で仲間外れにされている人でも、葬儀は地域で行っていました。しかし、共同体としての地域が変わっていく中で、徐々に死の社会性がなくなって私的なセレモニーに変容してしまったのです。

本尊を中心とした葬儀へ

地域差はありますが、1950年代までの葬送では、自宅などで行われる枕勤めから棺前勤行までは本尊があるお内仏でお勤めしましたが、その後出棺から葬列を組んで野（葬場）まで行って葬場勤行を行いました。しかし、「葬儀」が執り行われた葬場勤行の場に本尊はありませんでした。しかし、葬場勤行を通夜や棺前勤行と同じ場所で執り行うようになり、大きく考え方が変わりました。本尊を中心にお荘厳をし、その前にご遺体を安置して行う儀礼は、生死を超えていく仏教儀礼です。本尊の前において、人間としての一生を尽くして、命終を迎え、生死を超えていくという儀礼を行うのです。

南無阿弥陀仏や帰命尽十方無碍光如来は、私たちの所帰の本尊であり、報身如来といわれます。親鸞聖人の仏身論は二身論や三身論など多様な解釈がなされていますが、曇鸞大師が『浄土論註』

で説かれている法性法身と方便法身の二身論を特に大事にされていると考えられます。法性法身というのは真実そのものであり、色も形もない“はたらき”です。衆生において分別を許さない法性法身が、その真実性を保ったまま形をとって表現されたものが方便法身です。具体的には南無阿弥陀仏という言葉になった仏であり、絵像本尊や木像本尊です。ですから、この会場に掛けられている絵像本尊の裏にも「方便法身尊形」と書いてあります。方便として名号や絵像の形をとっていますが、ここに阿弥陀如来（真実）からのはたらきかけがあるのです。人間が生死を超えていくための仏の大慈大悲です。これが真宗の中心ですから、現代の葬儀壇（祭壇）に本尊が見えないということでは、そこで真宗の儀式は行えないのです。

どこに立って苦に向き合うのか

葬儀式での声明と作法というのは、その場が醸し出す共同感性を大切にすることで、理論で説明をしても理解しがたい部分があります。また、表白・弔詞・法話で語る言葉の質も大切になってきます。なぜなら葬儀を執行する僧侶には、僧侶自身の生死観がはっきりしているのか、そして遺族が抱える苦に対していかに応えていくのか、が問われているからです。言葉にならない遺族の思いを見つめ、それを言葉によって紡いでいくことこそ、宗教者の大切な存在意義だと思います。このことはグリーフケアとも関わっていると思います。

その時に注意しなければならないのは、法の立場から一方的に言葉を語らないこと、つまり目の前に佇む人の苦悩を見ることなく仏教を正論のごとく語らないことが大切です。たとえ正論であっても、目の前の人を傷つけてしまうならば、お釈迦様がなされた対機説法とは全く異なるものになってしまいます。「亡くなられた方は浄土に往生されました」「仏さまの世界に生まれました」とだけ語っても、悲しみに打ちひしがれている遺族にはなかなか届かないのではないのでしょうか。

機 の立場にある痛み、苦しみ、悲しみに寄り添った、そして報謝の念をもった言葉や姿勢が大切になってくると思います。自分も同じ凡夫として、仏法を伝えなければなりません。

本質と原点に帰る

「先の見えない時は、本質と原点を考える」という言葉があります。葬儀の本質は何かといえば、「死は人間（私）にはどうこうすることはできない」ということであり、原点とは「死と死者に対峙する」ということです。では葬儀社の企業としての本質と原点は何でしょうか。今は「お客様」にサービスを提供するということだけになっている現状があるように思います。また、その奥には急速に変化する社会状況に応じた葬儀社の都合があるのではないのでしょうか。葬儀社の方には遺族・宗教者ととともに「コーディネーター」としての役割を果たしていただければと思います。

葬儀や墓も、商売一辺倒になってしまったら、仏教・真宗ではなくなってしまいます。このことは、企業である葬儀社だけでなく、我々寺院関係者もよく考える必要があることです。お念仏の聲が聞こえる葬儀、「正信偈」をともに唱和する葬儀、それによって葬儀がその場に集うすべての人に信心が開かれる仏縁となることを願ってやみません。

第3章 - 2 参加者の声 （寺＝寺院関係者、葬＝葬儀社、門＝門徒）

1, 「葬儀」の現状認識と課題について

(A) 葬儀の変容（簡略化・省略とその背景）

- ・[寺] コロナを経ってから特に家族葬・一日葬・直葬が増加した。規模の縮小に伴って祭壇も略式となり、通夜や中陰を行わないケースも増加している。しかし葬儀をなくしたい訳ではない。
- ・[寺] 近頃では葬儀社と僧侶と親族だけになって、地域が抜けてしまっている。
- ・[寺] 葬儀の形が変わったというより人間関係が変わったのだと思う。人間関係の変化が葬儀に影響してきているのだと思う。
- ・[葬] 10%ぐらいは宗教者を呼ばない葬儀になっている。年間 2%ずつ増加傾向にあるので、10 年先にはどうなるのかと思う。
- ・[葬] 家族葬を選ぶ方は迷惑かけたくない、煩わせたくないという思いがあるように感じる。
- ・[葬] 所属している寺院すら知らないという現状になっている。
- ・[葬] 葬儀の規模・やり方などが小規模化していることの一因として、故人様とご遺族などの「親子関係の希薄さ」というワードが出てハッとさせられた。
- ・[葬] 収骨の際にお骨を受け取らない遺族も増えてきている。
- ・[門] 子どもの頃に経験した葬儀は近所の手伝いによって自宅で執り行われた。祭壇も村の所有のもの、喪主の白い衣装、袴も村の所有のもの、火葬場も村のものを使用し、翌日みんなで骨を拾いに行きました。それが自宅になり、葬儀会館になっていった。どのような形であれ、安らかな儀礼であってほしいと願う。

(B) 葬儀に対する価値観の変化

- ・[寺] 葬儀を知らない人が激増している。僧侶として葬儀についてしっかりと説明できないといけなくなっている。関わらなければ葬儀社さん主導で進むのも必然。
- ・[寺] 簡単に済ませてしまおうと考える門徒の方も実際多くなっている。
- ・[寺] 葬儀費用の問題は大きいのではないかと。お金がかからないのであればなんでもいいのではないかと感じる。
- ・[寺] 簡略化によって後悔を生むことが出てきている。弔い直し。特に無宗教の場合、後からやっぱり葬儀をしてほしいという依頼がある。
- ・[寺] 葬儀の布施収入は宗教法人にとって大きな収入源となっているが、今日、行っている葬儀は恥ずかしながら真宗の葬儀にはなっていない。葬儀が商売になっている。それは事実だと思う。
- ・[葬] 宗教的な儀礼や仏様や位牌を必要としない方もいる。儀式の形にしかこだわっていない。自分たちの都合でしか考えていないことが多い。
- ・[葬] 日にちの都合が合わなければ、所属の寺院でなくてもいいと考えている方が非常に増えている。
- ・[葬] 近年、遺族の方は葬儀を重要なものと認識していない方が多いように感じる。
- ・[葬] 僧侶のいないお葬式は葬儀社が勧めているわけではなく遺族からいらないといわれる。

- ・[葬] お客様の大多数は葬儀代金を安くしたいということが一番最初にきていると感じる。
- ・[門] 家族に迷惑をかけたくないため、出来る限り、自分が死んでからの準備を生前にしている。

2. 葬儀の意義・本質と宗教的意味

(A) 葬儀の意義とは

- ・[寺] 地域や風習、風土が異なる中で営まれてきた葬儀。それぞれに先達の方々が守り、尊んできて形となったものだと思う。
- ・[寺] 真宗の葬儀はご本尊を中心とし、亡くなっていかれた方への感謝の儀式だと思っている。つまりいのちをみつめる仏縁である。
- ・[寺] 葬儀には大きく二つの意味があると思う。一つには亡くなった人のことを思い出して語り合い、関係性を結びなおすグリーフケア的な視点。もう一点は故人を通して「お前も死ぬんだぞ」ということを受け取る宗教的な点。
- ・[寺] 葬儀を営むということは、これまでともに生きてきた親しい方の「死」を受け止めるため。そして亡くなられた方とどう関わってきたのかを考える場だと思う。
- ・[寺] 世俗の中に生きる私たちが、仏縁をむすぶためにあるのが葬儀などを中心とした儀式だと思う。ともに同じ方向（ご本尊にやご遺体）を向いて勤めさせていただく大切なご縁。世俗を世俗のままに終わらせない、それが仏法であり仏事。
- ・[葬] 葬儀は亡くなった方との区切りをつけ、人の死を受け止める、実感する大切な儀式だと思う。短い時間かもしれないが、儀式を通して見えてくるものがあるのではないかな。
- ・[門] 葬儀は単なる儀式ではなく、故人と親族をつなぐ場であり、故人を偲ぶと同時に私たちがこの先何を大切に生きていくかを見つめる機会でもあると思う。

(B) 葬儀における本尊について

- ・[寺] ご本尊を持っていき、荘厳を整えてご本尊を中心にする葬儀を行っている。
- ・[寺] 手を合わせる対象がないと、精神論だけでは手は合わせられない。そのためにご本尊があるのではないかな。
- ・[寺] 本尊がなくても葬儀はできるのではないかな。
- ・[寺] 本尊がなしならなしでいいと言ってしまうと、儀式的中心は本尊であることがわからなくなってしまう。本尊が中心だということを僧侶が示していくのはとても大切ではないかな。
- ・[寺] 本尊だけではない大事なものがあるのではないかな。
- ・[寺] 亡くなった方に手を合わせるのか、奥のご本尊に手を合わせるのかわからない。入寺して間もないので全く知らない方を送る難しさ（心の持ち方）、ただ偲ぶしかできない。

(C) 荘厳・儀式について

- ・[寺] 「荘厳は装飾ではない」という蒲池先生の言葉が印象に残った。今は装飾になっていると思った。
- ・[寺] 宗派として教学的伝統的に学び、組織として守り伝えていく必要があるのではないかな。一カ寺一カ寺の独自性に任せていたら自分たちで壊してしまうように思う。

- ・[葬] ご本尊が中心だと現場の職員が思っている、経営陣のところで祭壇の形を決められ、写真が中心になってしまったりする。
- ・[葬] 他の宗派は決まった形がある。真宗はそういったものがない。お寺によって考え方ややり方が違う。真宗は難しい。
- ・[門] 真宗の葬儀の意義をどのように具現化・大衆化すべきか。なぜ禅宗のように形式化されていないのか。
- ・[寺] 昔の葬儀の形が良くて、現在の形が悪いと考えがちだが、昔の葬儀の形も色々な工夫の中で出来上がってきたものである。今、何を願いとして、何を工夫していくべきかを考えることが大事。
- ・[寺] 「人間が人間だけでやっていく、現代の問題はそこにある」という言葉通り、私たちは自分の都合だけで葬儀を行い、そこに仏事を考えていなかった。自分自身にも突き刺さる鋭い指摘であると思いました。

(D) 遺族へのグリーフケア

- ・[寺] 遺体と死体の違いの話があったが、私は遺族の方には「お父さん」か「お母さん」というようにしている。亡くなったことを受け止められない方もいるため、すぐに遺体というのは辛い表現だと思う。
- ・[寺] 大切な方を亡くして遺族も心身ともに疲れている場面だと思う。そのような場に僧侶がいるということこそ大切だと思う。
- ・[寺] グリーフケア的な視点だけで葬儀を行うとセレモニーになる。故人から受け取らなければならないものを示すのが宗教者の役割だと思う
- ・[門] 儀式の意味を大切にしていきたい住職たちと儀式の意味や仏教的思想が希薄な一般の人々との溝をどう埋めていくか。孤独な遺族に宗教者がどう寄り添うのか、グリーフケアという視点からも大切な役割があると思う。

3. 葬儀における故人・遺族・僧侶・葬儀社の関係性

(A) 葬儀社と寺院の連携・情報共有

- ・[寺] 遺族ごとで葬儀に対する感情が違う。葬儀社とコミュニケーションをとって、僧侶と葬儀社のお互いが知りえない情報を交換できると良い。
- ・[寺] 普段から葬儀社と話し合える関係を作っている。還骨勤行の20分前に会場に行き、葬儀社と反省点などを話し合う時間になっている。
- ・[葬] 昔は亡くなった一報を門徒がお寺さんにしていたが、現在は葬儀社から直接お寺さんに連絡することが多くなった。
- ・[葬] お寺を無視して通夜や葬儀の時間を決めることはない。
- ・[葬] 一日葬については葬儀社としても、お寺さんに先に相談するようにしている。その上でお寺さんが遺族と葬儀の執行の仕方について相談してほしい。
- ・[葬] 家族葬で執り行う予定にしていた方に、ご住職がいろいろとお話をされ、結局通常の葬儀にされ、150人ほどの参列があり、よい葬儀になったと喜ばれたことがあった。

- ・[葬] 直葬でも宗教者を呼んで炉前の読経を提案している。それが満中陰や法事などお寺との繋がりになってほしい。

(B) 門徒とのコミュニケーション

- ・[寺] 門徒さんの側の世間の事情もよく分かるので歩み寄りをするが、時間や状況を配慮しすぎると、あまりの多様性に今度はこちらが疲弊してくる。
- ・[寺] ご門徒の親世代と付き合いがあっても子世代を知らないという問題がある。そして寺側も門徒さんの状況を若院世代へ引き継いでいないという問題もある。
- ・[葬] 故人様と生前のお付き合いのない立場として、どうしても生きて目の前にいるご遺族やお寺様のお話からしか分かりかねない部分がある。
- ・[門] 日々の小さな積み重ねが寺院と門徒を緊密な打ち解けた間柄にするとと思う。
- ・[門] 家族が亡くなるまで判断基準がなく、お寺さんとも普段交流がないため、葬儀とは何かという話をする機会もない。
- ・[門] 家族が亡くなると待ったなしで、どのような形であっても葬儀を執り行わなければならないため、何を基準にしたらよいかわからない。葬儀社の言いなりではないか？との思いがあった。

(C) 遺族の葬儀に対するニーズや疑問

- ・[門] 葬儀についてのマニュアルのようなものはないのですか？突然喪主になることがあるので戸惑うことが多い。
- ・[門] 終活を考えようかとなるけれど、どんな葬儀をと聞かれても、今日の話のように葬儀の原点など思いつきもしない。無知なので別院などに葬儀のパンフレットを置くなど周知させるものがほしい。
- ・[門] 母が亡くなった時に皆さんが精一杯のお勤めをしてくださったことが心に強く残っている。そういうことが儀式の大事なところだと思う。
- ・[門] 枕勤めから始まり、通夜・告別式と会館・寺院・火葬場との日程調整をどのように進めていけばよいか。まず住職（日頃からの信頼関係が大事だと思う）、会館（遺体の引き取り）、以降、寺と会館で火葬場との兼ね合いで相談。このような状況で遺族の意向が入り込む余地はあるのだろうか？

4. 僧侶の役割・心構え・教育

(A) 僧侶の心構え・資質

- ・[寺] 自分の都合だけで勤めていると簡略化していくのは当然だと思う。
- ・[寺] 相手に応じて話をするために、僧侶はいろいろなことを知っておく必要がある。様々な情報を浅くでもいいから広く知っておく必要があるし、多様な能力が求められる。真剣にやろうと思えば僧侶はきつい。楽にやろうと思えば楽にできてしまう。
- ・[寺] 私たち僧侶は本当に葬儀について知っているのか。考えたことがあるのか。形をこなせばそれでいいと思っていないか。

- ・[寺] どんどんシステム化（プラン化）されていく中で、本当に僧侶としてどう関わっていけるのかと苦悩してきた。まずは自分にできるお勤めをしっかりとやる。故人の思い出を語り、その時の自分の思いと今（亡くなった時）の思いを通夜や還骨のお勤めの時に必ず話をしてきた。
- ・[寺] 門徒の中には、初めて仏教の話や儀式にあう人もいる。そういった人にも共感できる葬儀式ができたらいと思う。
- ・[寺] 住職が何も知らないのは知ろうとしないからではないかと思う。
- ・[寺] なんでも要望通りにするお寺の方が葬儀社の方に重宝がられる。果たしてそれでいいのだろうか。
- ・[葬] 思っていたよりはるかに各寺の住職のモチベーションの開きが大きい。
- ・[門] 寺院と葬儀会社の関係を考えると、門徒としては葬儀社の努力で助かっている面もある。寺院側の努力が足りていない面があるのではないか。

(B) 僧侶の役割・責任・期待

- ・[寺] 葬儀が日常の仕事であるため本質を見失っていた。なぜ行うか本質・原点に立ち戻って考える必要がある。
- ・[寺] 人の死は悲しく寂しいことだが、通りいっぺんのことだけではいけない。その場その場で、自分で気づきをいただいて歩んでいかないと通過儀礼で終わってしまう。
- ・[寺] 意味や形や思い、何を変えてもよくて、変えてはいけないことは何なのか。宗教者の立場だけでなく、葬儀を形作る者の一人として守るべきものをしっかりと確かめていくことが重要であると気づかされた。
- ・[寺] 「葬儀をしてよかった」と思ってもらえるように、簡素化の流れにさせないように導いていく。それは大変なことだが非常に大切だと思う。
- ・[寺] 儀式が急速に変化し時代とともに簡略化される中、何をどのように勤めさせていただくか、考え続ける必要がある。
- ・[寺] 故人を尊ぶということがどういうことなのか、改めて考えていくべきだと思う。
- ・[門] お寺さんがもっと葬儀の必要性や意義を伝えてほしい。
- ・[門] 「式中初七日」など、儀礼の意味がおかしくなっていることについて、僧侶に丁寧に説明して理解してもらいたいし、死についてもっと語るべきだと思う。
- ・[門] 僧侶の教育を宗門がもっとやったほうがいいのか。「白骨の御文」というすごいものがあるのにもったいない。

第3章 - 3 実行委員の所感・提言

【葬儀の変容と社会状況】

近年、葬儀の形態が急速かつ大きく変化している。特に新型コロナウイルスの感染防止対策として密を避けることが社会通念として推進されたことにより、家族葬の増加による規模の縮小化（参列者の減少）、一日葬や直葬の増加による儀式の簡略化や省略、無宗教葬を打ち出した葬儀社が出現（法縁の減少）した。

しかしコロナ禍は単にきっかけに過ぎず、地域との関わりや親戚付き合い、お寺との付き合い、理解が十分ではない慣習とそれに費やす費用を忌避する心情が、もともと潜在的に持たれていたことが根本原因であったというべきである。新型コロナウイルスの緊張感が薄らいだ今、果たしてかつての儀礼が回復したか、法事や月忌はどうなったのか、法要行事への参詣者はどうなったのか。厳しい現実には直面していると言わざるを得ない。

【課題克服に向けて】

さらに、語り合いでも「遺族は葬儀を重要な儀式として認識していない」「簡単に済ませてしまおうと考える門徒も多くなっている」「所属の寺院でなくてもいいと考えている方が増えている」などの声が聞かれたように、寺院や僧侶、宗教的儀礼に対する意識の変化が進んでいる。

もちろん景気の先行き不透明感による経済的理由や家族構成、親子関係の変化などを理由とした葬儀の簡略化も考慮すべきであるが、日々の法務や日常生活の中で、門徒や地域、葬儀関係者などに対して対話や交流をどれだけ図っていくのか、また各儀式の意義などの説明をどれだけ地道に続けられるかということにしか、信頼回復の方途はないと思われる。

【僧侶の使命】

また、門徒や葬儀社から「マニュアルはないのか」、「どうして葬儀の形式や次第がお寺によって異なっているのか」などの声も一部聞かれた。葬儀・中陰の法要次第の軸となる形式はあるが、地域性や時代社会を潜ってきた変容の過程にあり、不変的なものではない。「これに従っておけばよい」という形式の定型化は、根本的願いの喪失、意味の空洞化、学習の停滞、そこから排除されるものを生むなどの懸念が容易に想像できる。

宗祖親鸞聖人は私たち真宗門徒に「聞思して遅慮することなかれ（『真宗聖典（第二版）』p. 160）」、つまり「問い続けよ、考え続けよ」と呼びかけられている。

一つひとつの現場は一期一会であり、またそこに集う遺族感情も一人ひとり異なっている。これまで、目の前に佇む一人の苦悩や悲しみに耳を傾けようとしてきただろうか。今、自身が行っていることはマニュアル化していないだろうか。移ろいゆく世間の中で、真宗（真に中心に据えるもの）を問い続けてきただろうか。袈裟・衣を纏ってそこに身を置く者の使命・役割とは何かを、遺族や参詣者、そして葬儀に携わる方々の声を聞きながら、考え続けなければならない。

おわりに

「今朝、親父が参らして貰いました」

私が生まれた滋賀の湖北地方では、枕勤めの連絡がお寺に入る時、このような言葉から始まる。つまり、「亡くなった」「逝った」「死んだ」ではなく、「参る」と言い表す。参るとは、浄土に参るということ。浄土とは仏の在(ましま)す場である。まさに、親鸞聖人の師であった法然上人の命終時、「浄土へ還帰せしめけり」と申された。辞書を紐解くと「還る」は元々いた場所に戻る、「帰る」は落ち着くところへ戻ると伝えられる。亡き人とともにいのちの営みを重ねてきた遺族は、浄土に還帰し仏となるということを、報謝の念をもって「参る」と表現してきたのである。

仏教教団において、枕勤め、通夜、葬儀にとどまらず、仏事において聞こえるお勤めは「聲明（しょうみょう）」といわれ、ことに我々の宗門では「聞の聲明」と言い伝えられてきた。言うなれば、仏事において執り行われる儀式全ては、他ならないこの私が、仏の聲（こえ）を聞くお勤めなのである。

娑婆世界において父母、祖父祖母、我が子と呼んだ亡き人が、浄土へ還帰せられ仏となる。蒲池先生の講義では、かつての湯灌の「コウゾリ」という形を通して「俗体から法体に」と、また棺覆いや天蓋をもってご遺体を「仏」として表現されているとご教示いただいた。亡き人が、法身となられ光輪際なく世の盲冥を照らす儀式となる。

「真宗の葬儀」とは、決して遺された者の思いが中心となって執り行う偲ぶ会、お別れの会といわれるようなセレモニーではない。儀式の中心は仏であり、そこで我々遺された者が仏に照らされ、その願いを聞くことによってのみ、仏が仏たりえる。換言すれば、亡き人を仏として手を合わせていく新たな関係の始まりとなるのが真宗の儀式である。そこに響くのは「南無阿弥陀仏」の聲である。

今日、千変万化を遂げる弔いの儀式ではあるが、決して時流（世事）の中で仏事を営むのではない。仏法から常に世事が問われていることを忘れてはならない。時流に翻弄され、世の盲冥のただ中にあるこの私が光輪となられた仏の聲を聞く。様々な時と場によって変化を遂げようとも、葬儀がどこまでも如来のみ教えに遇う「聞」の仏事であり続けることを願ってやまない。

最後に講師を勤めていただいた蒲池勢至先生、講座に参加いただいた寺院関係者、ご門徒、そして貴重な声を聞かせてくださった葬儀社の皆様に心より御礼申し上げます。

南無阿弥陀仏

真宗の葬儀実行委員会 委員長 樺山正樹

付 録

■この報告書は、名古屋別院 HP「お東ネット」→「資料ダウンロード」→「教化リーフレット」からダウンロードできます



<https://x.gd/nMBz7> （お東ネット）

■抄録として掲載している蒲池先生の講義は、下記の QR コード（名古屋教区教化センター公式 YouTube チャンネル内）から視聴できます



<https://x.gd/6x9q9>

第 1 回講座「枕勤め」



<https://x.gd/tzyTu>

第 2 回講座「通夜」



<https://x.gd/lDXxQ>

第 3 回講座「葬儀」

《 真宗の葬儀 実行委員会 》

委員長 榎山 正樹

委 員 荒山 淳

伊藤 正志

岩田 好司

大河内 真慈

滝 亨

名和 正真

服部 あずさ

廣田 暁

宮田 素樹

八代 篤典 （委員は五十音順）

問い合わせ 052-331-2468（真宗大谷派 名古屋教務所）

2025 年 6 月発行

真宗大谷派名古屋教区教化委員会

真宗の葬儀 実行委員会

